

# 日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

## 四条金吾殿御返事

ぼんのんじょう  
こと

### （梵音声の事）

新版

1523

フ

1529

しじょうきんごどのはんじ ほんのんじょう こと

# 四条金吾殿御返事（梵音声の事）

ぶんえい

ねん

がつ

さい

しじょうきんご

文永 9年 ('72) 9月 51歳

がつ

四条金吾

夫れ、斎の桓公と申せし王、紫をこのみて服給いき。楚

そ

せい

かんこう

もう

おう

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

の莊王といいし王は、女の腰のふときことをにくみしかば、

いっさい

とわり

こし

細

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

一切の遊女、腰をほそからせんがために、餓死しけるもの

多

いっさい

おお

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

おおし。しかれば、一人の好むことをば、我が心にあわざ

おお

せい

おお

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

れども、万民隨いしなり。たとえば、大風の草木をなびか

たいかい

しゅる

おお

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

し、大海の衆流をひくがごとし。風にしたがわざる草木は、

かい

かぜ

おお

によ

こし

太

おお

が

し

憎

き

たま

さ

い

おれうせざるべしや。小河、大海におさまらずば、いざれ

折

失

しょうが

たいかい

納

納

こくおう もう

せんじょう

のところにおさまるべきや。国王と申すことは、先生に

ばんにん

万人にすぐれて大戒を持ち、天地および諸神ゆるし給いぬ。

だいかい たも

てんち

しょじん 許

たま

ににん

その大戒の功德をもちて、その住むべき国土を定む。二人

さんいんとう おう

す

こくど きだ

ち おう

てんのう かいおう

さんのうとう

三人等を王とせず。地王・天王・海王・山王等、ことごと

らいりん ひと 守

く来臨してこの人をまばる。いかにいわんや、その國中の

しょみん

諸民、その大王を背くべしや。

おう

あくぎやく おか

いち に さんどとう

しょてんとう みこころ かな

この王は、たとい惡逆を犯すとも、一・二・三度等には

そ う

だいおう ばつ

しょてんとう みこころ かな

左右なくこの大王を罰せず。ただし、諸天等の御心に叶わ

いちおう てんぺんち ようとう

ざるは、一往は天変地天等をもちてこれをいさむ。事過分す

諫

じ か ぶ ん

しょてんぜんじんとう こくど しゃり たも  
れば、諸天善神等、その国土を捨離し給う。もしほ、この大王  
のかいりき 尽 こくど 亡  
の戒力つき、期來つて国土のほろぶることもあり。また  
ぎやくざいおお ごきた こくど  
逆罪多くにかさなれば、隣国に破らるることもあり。善惡  
ぜんあく  
くに かなら おう したが  
に付いて、国は必ず王に隨うものなるべし。  
せけん ぶつぱう  
世間かくのごとし、仏法もまたしかなり。仏陀すでに仏法  
おうぼう ふ たも ぶつだ  
を王法に付し給う。しかれば、たとい聖人・賢人なる智者  
おう おう ぶつぱう ふ ぶつぱう  
なれども、王にしたがわざれば、仏法流布せず。あるいは後  
おう かなら だいなんきた  
には流布すれども、始めには必ず大難来る。  
るふ はじ おう  
迦弔志加王は仏の滅後四百余年の王なり。健陀羅国を  
かにしかおう ほとけ めつごしひやくよねん けんだらこく

たなごころ

握

ごひやく

あらかん

きえ

ばしゃろん

掌 のうちににぎれり。五百の阿羅漢を帰依して婆沙論

にひやつかん

造

こくちゅう

しようじょう

くに

二百巻をつくりしむ。國中すべて小乗なり。その国に

だいじょうひろ

ほっしゃみつたらおう

ごてんじく

したが

大乗弘めがたかりき。發舍密多羅王は五天竺を随えて

ぶつぱう

うしな

しゅそう

くび

斬

たれ

ちしや

かな

仏法を失い、衆僧の頸をきる。誰の智者も叶わず。

たいそう

けんおう

げんじょうさんぞう

し

ほっそうしゅう

たも

たま

太宗は賢王なり。玄奘三藏を師として法相宗を持ち給

たれ

しんか

背

ほっそうしゅう

だいじょう

いき。誰の臣下かそむきし。この法相宗は、大乗なれど

ごしきょうかくべつ

もう

ぶつきょうちゅう

大

禍

み

も、五性各別と申して、仏教中のおおきなるわざわいと見

げどう

じやほう

過

あくほう

がつし

しんたん

えたり。なお外道の邪法にもすぎ、惡法なり。月支・震旦・

にほん さんごくとも

許

つい

にほんこく

でんぎょうだいし

日本、三国共にゆるさず。終に日本国にして伝教大師の

みて

じゃほうとど

お

おお

禍

御手にかかりて、この邪法止め畢わんぬ。大いなるわざわいなれども、太宗これを信仰し給いしかば、誰の人かこれをそむきし。

真言宗と申すは、大日經・金剛頂經・蘇悉地經による。

これを大日の三部と号す。玄宗皇帝の御時、善無畏三藏・

金剛智三藏、天竺より将ち来れり。玄宗これを尊重し給う

こと、天台・華嚴等にもこえたり。法相・三論にも勝れて思

しめすが故に、漢土はすべて大日經は法華經に勝るとおもい、日本国当世にいたるまで、天台宗は真言宗に劣るな

りとおもう。彼の宗を学する東寺・天台の高僧等、慢過慢をおこす。ただし、大日經と法華經とこれをならべて、偏党を捨ててこれを見れば、大日經は螢火のごとく、法華經は明月のごとく、真言宗は衆星のごとく、天台宗は日輪のごとし。偏執の者云わく「汝いまだ真言宗の深義を習いきわめずして、彼の無尽の科を申す」。ただし、真言宗、漢土に渡つて六百余年、日本に弘まつて四百余年、この間の人師の難・答あらあらこれをしれり。伝教大師一人この法門の根源をわきまえ給う。しかるに、当世日本国第一の科

これなり。勝をもつて劣と思い、劣をもつて勝と思うの故に、大蒙古国を調伏する時、還つて襲われんと欲す、これなり。

華嚴宗と申すは、法藏法師が立つるところの宗なり。則天皇后の御帰依ありしによりて、諸宗肩をならべがたかりき。

しかれば、王の威勢によりて宗の勝劣はありけり。法に依つて勝劣はなきようなり。たとい深義を得たる論師・人師なりといふとも、王法には勝ちがたきゆえに、たまた

か

じん

だいなん

遭

しきそんじや

ま勝たんとせし仁は大難にあえり。いわゆる、師子尊者は

だんみらおう

くび

だいばほさつ

げどう

檀弥羅王のために頸を刎ねらる。提婆菩薩は外道のために

せつがい

じく どうしよう

そざん

なが

ほうどうさんぞう

かお

殺害せらる。竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に

かなやき 押

こうなん

はな

火印おされて江南に放たれたり。

にちれん ほけきよう ぎょうじや

しかるに、日蓮は法華経の行者にもあらず、また僧侶の

かず

入

よ

ひと

したが

あみだぶつ

けしん

たも

数にもいらず。しかれども、世の人に随つて阿弥陀仏の

みょうこう

たも

じゅう

すなわ

あみだぶつ

けしん

たも

ぜんどう

名号を持ちしほどに、阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善導

おしようい

たも

じゅう

すなわ

あみだぶつ

けしん

たも

ぜんどう

和尚云わく「十は即ち十生じ、百は即ち百生ず乃至

せん なか ひと

な

せいしほさつ

けしん

たも

ほうねん

千の中に一りも無し」。勢至菩薩の化身とあおがれ給う法然

上人、この釈を料簡して云わく「末代に念佛の外の法華經等を雜うる念佛においては、千の中に一りも無し。一向に念佛せば、十は即ち十生ず」云々。日本國の有智・無智、仰いでこの義を信じて今に五十余年、一人も疑いを加えず。ただ日蓮の諸人にかわるところは、「阿弥陀仏の本願には『ただ五逆と誹謗正法とのみを除く』とちかい、法華經には『もし人信ぜずして、この經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん』と説かれたり。これ、善導・法然、謗法の者な

持

あみだぶつ 捨

よぶつ

れば、たのむところの阿弥陀仏にしてられおわんぬ。余仏・

よきょう

われ なげう

うえ すく たも

およ

余経においては、我と抛ちぬる上は救い給うべきに及ばず。

ほけきょう

もん

むけんじごくうたが

うんぬん

法華経の文のごときは、無間地獄疑いなし」と云々。しか

にほんこく 押

並

かれ

でし

るを、日本国はおしなべて彼らが弟子たるあいだ、この大難

免

むじん

ひけい

巡

にちれん

怨

まぬかれがたし。無尽の秘計をめぐらして日蓮をあだむ、

これなり。

さきさき

しょなん

そちら

こぞくがつじゅうににち

ごかんき

前々の諸難はさておき候いぬ。去年九月十二日、御勘氣

被

よ

こくべ

刎

をかぶりて、その夜のうちに頭をはねらるべきにてありし

か

よ

の

くに

が、いかなることにやよりけん、彼の夜は延びて、この国に

來つていままで候に、世間にもすてられ、仏法にもすてられ、天にもとぶらわれず、一途にかけたるすてものなり。

しかるを、いかなる御志にてこれまで御使いをつかわし、御身には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかわされたること、両三日はうつつともおぼえず。

彼の法勝寺の執行が、いおうが島にてとしごろつかいける童にあいたりし心地なり。胡国の夷・陽公といいしもの、漢土にいけどられて北より南へ出でけるに、飛びちがいける雁を見てなげきけんも、これにはしかじとおぼえたり。

ほけきょう　い  
せんなんし　せんによにん　われめつど  
ただし、法華經に云わく「もし善男子・善女人、我滅度し  
て後、能くひそかに一人のためにも、法華經の乃至一句を説  
かば、當に知るべし、この人は則ち如來の使いにして、如來  
に遣わされて、如來の事を行づ」等云々。法華經を一字一句  
も唱え、また人にも語り申さんものは、教主釈尊の御使い  
なり。しかれば、日蓮、賤しき身なれども、教主釈尊の勅宣  
を頂戴してこの國に來れり。これを一言もそしらん人々は  
罪を無間に開き、一字一句も供養せん人は無数の仏を供養  
するにもすぎたりと見えたり。

きょうしゅ しゃくそん

いちだい

きょうしゅ

いつさい しゅじょう

どうし

教主釈尊は一代の教主、一切衆生の導師なり。

はちまんほうぞう

みなきんげん

じゅうにぶきょう

みなしんじつ

むりょうおつこう

八万法藏は皆金言、十二部経は皆真実なり。

無量億劫より

このかたとも

たま

ふもうごかい

しょせん

いつさいきょう

以来持ち給いし不妄語戒の所詮は、一切経これなり。いず

れも疑うべきにあらず。ただし、これは總相なり。別して

そそう

べつ

たずぬれば、如來の金口より出来して、小乗・大乗、顯・

尋

しゅつたい

しようじょう

だいじょう

けん

密、權經・實經これあり。今この法華經は、仏、「正直に

ほとけ

しようじき

まさ

方便を捨つ」等、乃至「世尊は法久しくして後、要ず當に

のち

かなら

ひと

真実を説きたもうべし」と説き給うことなれば、誰の人が

と

たも

たれ

ひと

疑うべきなれども、多宝如來証明を加え、諸仏舌を梵天

うたが

たほうによらいしようみよう

くわ

しょぶつした

ぼんてん

に付け給う。

おんきょう

いちぶ

さんぶ

いつく

されば、この御経は、一部なれども三部なり、一句なれ

さんく

いちじ

さんじ

ほけきょう

いちじ

ども三句なり、一字なれども三字なり。この法華経の一字の  
功德は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御功德を一字におさめ給

によいほうしゅ

いつしゅ

ひやくしゅ

おな

う。たとえば如意宝珠のべとし。一珠も百珠も同じきこと

なり。一珠も無量の宝を雨らす。百珠もまた無尽の宝あ

ひやくそう

す

いちがんないひやくがん

いちがん

り。たとえば、百草を抹つて一丸乃至百丸となせり。一丸

ひやくがん

たま

やまい

じ

同

たと

たいかい

も百丸も、共に病を治することこれおなじ。譬えば、大海

いったい

しゆる

そな

いつかい

まんる

あじ

の一滴も衆流を備え、一海も万流の味をもてるがべとし。

みょうほうれんげきょう もう そうみょう にじゅうはっぽん もう べつみょう  
妙法蓮華經と申すは總名なり。二十八品と申すは別名  
なり。月支と申すは天竺の總名なり。別しては五天竺これ  
なり。日本と申すは總名なり。別しては六十六州これあ  
り。如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり。別しては六十六州これあ  
わつて頂上に頂戴して、帝釈これを持つて宝をあらす。  
仏の身骨の如意宝珠となれるは、無量劫來持つところの  
大戒身に薰じて骨にそみ、一切衆生をたすくる珠となるな  
り。たとえば、犬の牙の虎の骨にとく、魚の骨の鷗の気に消  
ゆるがごとし。乃至、師子の筋を琴の絃にかけてこれを彈け

よ いつさい けもの すじ げん みな切 破 ほとけ せつぱう  
ば、余の一切の獸の筋の絃、皆きらびやかにやぶる。仏の説法  
をば師子吼と申す。乃至、法華經は師子吼の第一なり。

ほとけ ししく ないし ほけきよう ししく だいいち  
仏には三十二相そなわり給う。一々の相、皆百福莊嚴

にくけい びやくじゅう まい みなひやくふくしようごん  
なり。肉髻・白毫など申すは菓のごとし。因位の花の功德

とう な さんじゅうにそう そな たも ないし はな くどく  
等と成つて三十二相を備え給う。乃至、無見頂相と申すは、

しゃかぶつ おんみ じようろく ちくじょうげどう しゃくそん おんたけ 計  
釈迦仏の御身は丈六なり。竹杖外道は釈尊の御長をはか

らす。御頂を見奉らんとせしに、御頂を見たてまつ

おうじぼさつ おんいただき み だいほんてんのう  
らず。応持菩薩も御頂を見たてまつらず。大梵天王も

おんいただき み  
御頂をば見たてまつらず。これはいかなるゆえぞとたず

故

尋

ふぼ ししょう いただき ち 付 くぎょう たてまつ  
ぬれば、父母・師匠・主君を、頂を地につけて恭敬し奉  
りしゆえにこの相を感得せり。

ないし ぼんのんじょう もう ほとけ だいいち そう しょうおう だいおう  
乃至、梵音声と申すは仏の第一の相なり。小王・大王・

てんりんおうとう そう いちぶんそな  
転輪王等、この相を一分備えたるゆえに、この王の一言に、

くに やぶ くに おさ せんじ もう  
國も破れ、國も治まるなり。宣旨と申すは、梵音声の一分

なり。万民の万言は一王の一言に及ばず。則ち三墳五典な

り。 もう ぼんのんじょう いちごん およ  
など申すは、小王の御言なり。この小国を治め、乃至

だいぼんてんのう さんがい しゅじょう したが  
大梵天王、三界の衆生を隨うること、仏の大梵天王・

たいしゃくとう ほとけ だいぼんてんのう  
帝釈等をしたがえ給うことも、この梵音声なり。

たいしゃくとう たも ぼんのんじょう  
帝釈等をしたがえ給うこと、この梵音声なり。

ほんのんじょう

いつさいいきょう

な

いつさいいしゅじょう

りやく

これらの梵音声、一切經と成つて一切衆生を利益す。

なか

ほけきょう

しゃかによらい

おんこうるぎし

か

あらわ

その中に、法華經は、釈迦如來の御志を書き顯して、こ

おんじょう

もんじ

な

たも

ほとけ

みこころ

もんじ

そな

の音声を文字と成し給う。仏の御心はこの文字に備われり。

しゅうし

なえ

くさ

いね

替

替

たとえば、種子と苗と、草と稻とはかわれども、心はたが

しゃかぶつ

ほけきょう

もんじ

替

こころ

ひと

わす。釈迦仏と法華經の文字とはかわれども、心は一つな

しゃかによらい

ほけきょう

もんじ

はいけん

たま

じょうじん

り。しかれば、法華經の文字を拝見せさせ給うは、生身の

しゃかによらい

会

思

釈迦如來にあいまいらせたりとおぼしめすべし。

こころもし

さどのくに

送

遣

思

お

この志、佐渡国までおくりつかわされたること、すでに

しゃかぶつし

まこと

こうよう

せん

きょうきょう

に釈迦仏知ろしめし畢わんぬ。實に孝養の詮なり。恐々

きんげん

謹言。

ぶんえいくねん

文永九年

月

日

しじょうさぶろうざえもんのじょうどのごへんじ  
四条三郎左衛門尉殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押